

「戦争の悲惨さを伝える人に」

四ツ小屋小学校 6年2組 大 山 凛

「凛にはまだ早いと思っていたけれど、浅利さんの朗読を聞いたのなら、大丈夫かな。」

学校で浅利香津代さんの、平和の朗読会があった日のことです。土崎空襲についての、浅利さんの朗読は迫力がありました。私はその場にいるような気持ちになり、泣くのをこらえるのに必死だったことを家族に話したところ、母が分厚い本を持ってきたのです。題名は「広島・長崎原子爆弾の記録」。それは、私が今まで見たことのないような恐ろしい本でした。どの写真も衝撃的で、私は目をおおいたくなりました。

私は以前、そう祖父母が、土崎空襲にあつて角館に疎開した事は聞いていました。しかし漠然と受けとめていて、怖さや苦しみを感じることはありませんでした。この日、私は初めて戦争の本当の恐ろしさというものを実感しました。

先日読んだ新聞記事に「戦争の記憶が遠ざかる時／戦争がまた／私達に近づく。」とありました。私は朗読を聞いたり本を見たりしたことで、戦争の悲惨さというものを少しは知ることができましたが、戦争の悲惨さが分からない人も多いと思います。戦争の記憶は遠ざかりつつあるのではないのでしょうか。

今、日本にはロシアとの間に領土問題、韓国との間に貿易問題、北朝鮮との間に拉致問題などたくさん問題があります。国と国との間の問題は世界中にあることと思います。昔は国と国との間の問題が戦争に発展したことがたくさんありました。しかし、今は話し合いで解決するようになっています。戦争のない今の状況を維持していくためにも、私達は戦争の悲惨さを記憶にとどめ、伝えていくべきだと私は考えます。そのために私は、母が私に戦争の悲惨さを伝えてくれたように、自分の子どもにも戦争の悲惨さを伝えていくことができるような大人になりたいです。